第10回清水町みらい会議要旨

〇開催日　令和４年４月28日(木)
〇会　場　清水町役場４階　第１会議室
〇出席者(委員)
・岩﨑　清悟　座　長　（静岡ガス株式会社　特別顧問）
・中山　　勝　副座長　（一般財団法人企業経営研究所 理事長）
・植田　勝智　委　員　（ファルマバレーセンター　センター長）
・川村結里子　委　員　（株式会社結屋 代表取締役）
・長倉　一正　委　員　（有限会社長倉書店 代表取締役）
・三船美也子　委　員　（一般社団法人日本親子体操協会　理事）
・矢嶋　敏朗　委　員　（日本大学国際関係学部 国際総合政策学科 准教授）
〇欠席者(委員)
・鈴木　誠一　委　員　（株式会社エステック 代表取締役）

令和３年度　清水町みらい会議のまとめについて（報告）

・　事務局から令和３年度に行った清水町みらい会議のまとめについて報告を行った。

まちづくりビジョンについて

清水町のまちづくりビジョンについて、各委員から忌憚のない意見を発言いただいた。

１　ビジョン全体について

・　まちづくりビジョンの５つの柱から思うのは、目指す方向はくらしに優しい町なのだろうということ。それは例えば子供が安心してまち歩きができるような環境であり、あるいは高齢者や障がい者が安心してまち歩きができるような環境である。
・　町の未来について考えると重要な部分が２つある。１つがくらしに優しい町に向けた町民への対応と、もう１つは歳入への対応である。
・　あれもやるこれもやるという形にすると町の顔が見えなくなってくる。町のブランドをどう作るのか。行政の立場では、非常に難しいが、いらないものは削る必要がある。町の未来のためには、背骨をしっかりと決めないといけない。
・　よくある行政のビジョンでは、満遍なく全てを行うことができれば良い町に

なるようなメッセージのものが多い。５つの柱も同様である。この町をどんな町にしたいというメッセージが受け取りづらい。もっと特色を出したほうが良いのではないかと思う。

・　ビジョンや基本構想などは素晴らしいものができたとしても、それをどのように進めていくかが重要である。ビジョンを作っても今までと同じことを繰り返してしまうことがある。

２　観光について

⑴　「清水町らしさを守り・活かす新しい観光の推進」の実績について

・　実績を見ると清水町らしさを守り生かす新しい観光は、ほとんど何もできていない。

・　観光というのは、基本的に自分の知らないところ、普段行かないところ、一定の距離が離れたところに行くことである。

・　現在の町が進めている施策は、住んでいる人たちが自分のくらしを豊かにするものである。

・　観光というよりは、地域への愛着の醸成のような表現の方が良いのではないか。

・　例えば先生方にジオガイドの講習など、子供たちに地域教育をすることはすばらしいことで、長いスパンで見れば、観光人材の育成なのかもしれないが、恐らく今の取組は、観光人材育成というよりも、地域の人材育成とか地域教育の色が強い。

⑵　観光資源について

・　観光を柱に町を発展させることはイメージしにくい。

・　観光客が訪れ、お金を使うような観光資源が町にはあるのか。

・　柿田川は観光資源かもしれないが、観光客がそこでお金を使ってもらうビジネスとして考えた場合、それは成り立たない。観光客にお金を使ってもらうようになることが重要な部分である。

・　柿田川は知名度が高く、狩野川や丸池公園などは自然環境が良いが、これらは観光資源とは言えない気がする。

・　町のどこからでも富士山が見えて景観が良いが、それは町独自のものではなく近隣市町はどこでも同じである。

⑶　観光事業の今後について

・　選択集中をするのであれば、住みやすいまち・高齢者に優しいまちだと感じてもらう施策でいった方が良い。観光よりも、他の施策にウエイトを置いていった方が良いのではないか。

・　町の観光を盛り上げていくことは、町民から本当に求められているのか。

・　町の観光産業の売上げ等は、他市町に比べて少なく宿泊施設もほとんどないという現状にあって、それでも観光を掲げるのであれば、清水町型の観光はこういうものだというメッセージが必要である。
・　シビックプライド（※１）を醸成しながら、町に愛着を持ってもらうということにアプローチができる取組があれば、清水町型の観光はどのような観光かというメッセージがもう少し解像度が上がってくるのではないか。
・　近隣市町との広域な取組に積極的に参画して、広域観光の一翼を清水町の柿田川が担っていくような形でＰＲしていくのが良いのではないか。
・　本町にも大きな企業があり、そのような企業が、観光的な企業見学や社内食堂など、何か合わせてやっていけば、伊豆半島にはない観光ができる。行政が民間企業に提案し、民間の運営をサポートするというような形ができれば、新しい１つの観光が作れるのではないか。

３　地域経済について

⑴　町の財政状況

・　将来の町の財政を見越し、必要があれば改善をしていかなければならない。昔のように企業誘致を進めていけば良いとの発想ではいけない。日本全体が少子化で成長力がなくなっている現在、経済の成長を当てにして、その一部を取り込もうという発想は捨てたほうが良い。
・　町の予算は、一般会計では100億円で、特別会計では180　億円ほど。一般会計で見るとそのうちの約55%が町税である。財政状況は悪くはない。半分以上は町税で賄えるという自治体は、全国でも多くはない。
・　どのようにして町の収益を上げていくか。一番は固定資産税である。今の町内の市街化調整区域をいかに市街化区域に編入していくのか。それができれば付加価値を上げて固定資産税を増やしていくことができる。
・　国道１号から的場方面へ南北道路を通す計画がある。区画整理をしながら進めたいが、反対している方もいる。
・　町政の持続性を考えた場合、歳入をどのようにして高めるかということは、非常に大切な軸である。

⑵　現状について

・　地域経済の活性化には、高付加価値産業をいかにこの地域に根を生やさせるかという部分が重要になる。長泉町が今非常に注目をされているのは、地域に所得の高い方が住んでいるということが特徴ではないかと思う。がんセンターの医療従事者が貢献しているという話を聞いている。本町には医療センターがある。この方々を取り込む方向を一つ考えた方が良い。

4　他県・他市町の事例

・　富山の能作という会社は、地場産業の銅でいろいろなものを作っており、製造工程を見学できる。多くの方が訪れ、地域の子供たちも見学できる。能作の作業現場を見て、将来は能作に勤めたいという気持ちを持つ。

・　新潟三条市の爪切りの製造業者の諏訪田製作所は、作業現場を見学できる。ＩＴ技術やＷｉ−Ｆｉを利用し、スマホやタブレットも利用している。

　社員食堂に併設して誰でも使える食堂があり、三条市の風景を見ながら食事をすることができる。年間３万人の来場がある。さらに、併設した民間の保育所があり、社員だけではなく地域の方々も利用できる。保育所は静岡県磐田市の会社である。

・　三島市では、住民の方に観光アンバサダーとして観光の情報発信をしてもらうなど、住民参加型の対応をしている。

・　西伊豆町は、夕日を見ながらのコンサートを毎年行っている。

5　文化について

・　先日、コンサートが町内で開かれ、多くの聴衆が来ていた。ポテンシャルはあり、このような機会を増やし積み重ねていくことが必要である。

・　本が好きな方は、漫画をきっかけとしている人が多い。漫画を買いに本屋に行き、その本屋で、面白そうな本があったので少し読んでみたことがきっかけとなる。社会現象になった鬼滅の刃は、コロナ禍でヒットし、多くの方が書店に買いに行ったことにより、鬼滅の刃だけでなく、書店全体の売上げが大きく伸びた。しかし、漫画は、教科書に何十年も前に掲載されているにもかかわらず、図書館に漫画を入れていくという考えがない。

・　本を購入する予算がないのであれば、家庭に眠っている本を学校図書に寄付してもらうように仕向ければ良い。

・　ロッカーの上に読んで良かった本を並べて、他の子供たちに紹介している取組を行っているクラスがある。

・　学校の図書室を何とかして、話しやすい雰囲気、明るく入りやすい雰囲気にしていきたい。

・　学校の図書室は鍵がかかっている。いつでも誰でも自由に入れる図書室でなければいけない。

・　図書館は、施設運営を広域化したり、大学の図書館のように非常にレベルが高い施設と連携するなどの対応が必要である。

6　教育について

⑴　社会に対する関心について

・　疑問に答える教育ではなく、小さい時から社会の問題に対して、双方向のビジョンを分かち合う形で行っていく教育が必要であり、このような教育を町に取り入れていったらどうか。
・　文理融合のＳＤＧｓに関する新学部を創設しようとする大学がある。若い方にＳＤＧｓに関することを学ばせることは難しいのではないかと思っていたが、アンケートにより我々が想像する以上に 16、17 歳ぐらいの高校生から社会問題に関心があることが分かった。若者の社会への関心は、昔とは全く違うと感じている。
・　子供たちは十分に社会問題について考え、関心を持っている。それを引き出す教育が必要である。その役割を果たす仕組みが町の中にあれば、教育のレベルを向上させることができて、大きな特色となる。
・　平均的な人間を育てていくということについては、日本の教育はすばらしいが、能力の高い子供を更に高みに導く教育という点は日本の教育の弱点であり、大きな課題である。清水町も同様である。これからは授業の形態を考えていかなければいけない。

⑵　外部講師の活用

・　各企業、学校、大学等で多くを経験してきた人たちが、定年等によりリタイアしている。こういう人材をうまく活用してはどうか。先生たちは学校のカリキュラムで手いっぱいである。小中学校の決められたカリキュラムの外で講義を行うことも考えるべきである。
・　大学教授は、高度な知識や技術を身につけている社会人から教授となる産業界出身の方がいる。大学の教員は定年が大体 65 歳だが、定年を迎えても 70 歳ぐらいまでは働いている方が多いため、このような実務経験のある教員の力を活用し、例えば地域の方に授業の教え方を教え、その方が登壇するなどの仕組を作っていくとよい。大学側も社会貢献になる産学連携が可能ではないか。
・　私立の高校では、地元の企業に勤めている人や起業している人などに授業を行ってもらうことがある。依頼は、先生個人のツテだけで行っている状況のため、システム化して町独自の取組として良いのではないか。町内には最先端の技術を持つ工場があり、また製造業も多いため、その方々と教育をつなぐ仕組みができると良い。個人のツテだけで行っていては、持続性はない。

⑶　教育システムの構築

・　清水町は数年前からコミュニティ・スクール（※２）の運営により、保護者、地域住民の学校運営への積極的な参画の促進や連携強化を進めている。学校だけでは、子供たちを育成することはできない。地域の方など多くの方の力を借りながら子供たちを育てていくことが必要である。

・　民間企業の工場見学等について制度化すれば、先生方もストレスなく実施できるような基盤整備が進む。町ならではの教育システムが実現できる。
・　教育現場と企業などの関係を様々な取組でシームレス（※３）にしながら、子どもたちのキャリア教育にもつながるような体制づくりができると、“町ならではの教育”が生まれ町の企業の色も出る。このような取組は、小さな町だから可能であるといったメッセージも発信され、実際に住んでいる方が実感できるようになると良い。初めはモデル校からのスタートでも良い。
・　高度な技術を持った人たちが地域に定住すると、地域の力を底上げすることができる。しかし、選ばれる町になるには教育や文化が欠けている。特に教育ということについて考えていかなければならない。教育については、今までと同様に各個人の格差は解消していく必要はあるが、上位を目指す人たちを引っ張り上げる教育も必要である。

７　道路事情について
・　日本の道路は歩道と車道がしっかりと分かれていない。これは日本の最も劣ったインフラ整備である。非常に危険であり、特に子供、高齢者、障がいを持った方々にとっては大変な環境だと思う。
・　道路を歩車分離して、少しずつでも整備していった方が良い。大きく推進することができれば、間違いなく清水町は注目される。注目されることが、土地の値段が上がるきっかけとなる。土地の値段が上がることは、固定資産税が増えることである。
・　町では、ウォーキングや健幸マイレージを進めているが、歩道と車道の分離ができていなければ危険である。
・　車のための道路の建設ということはもう必要がない。日本では、今以上に車が増えない。今後は、歩く人のための道路づくりが大切になってくる。
・　将来の移動手段として注目されている無人運転を検討しても面白いのではないか。
・　長泉町は、池田柊線を開通させたことにより、現在道路を中心として非常に発展している。過去の道路整備により現在発展することができている。今後の道路整備は歩行者のための整備が中心となれば、付随して土地の価格が上がり固定資産税が上がるなどの影響が出るかもしれない。法人税は景気に左右されるが、固定資産税は景気の動向に左右されない。
・　新しい道路計画としては、玉川・卸団地線がある。国道１号から南下していく道路で、狩野川にいわゆる第三架橋をかける計画。この道路は沼津商業高校の方につながっていく。歩道がしっかりと確保したものとなり、道路の周りは市街化されていくということを考えている。

８　今後のまちづくりについて

・　清水町は、医療や環境というワードが町のイメージに合うと考えていて、例えば医療や環境ビジネスに特化し、この分野で起業する方には助成等を手厚くし、事前相談の受付を充実するなど、町の特色を出していくと面白いのではないかと思う。

・　行政ができることは、条例の制定である。うまく民間の力を誘導できるように条例を制定する。清水町なら活動しやすいと感じてもらう対応ができると良いのではないか。

・　清水町のイメージは、良くも悪くも無色透明。特徴のない町である。無色透明というのは、まちづくりという点ではやりにくい。何をブラッシュアップして、何に特化した方が良いのかを見つける必要がある。

・　第５次総合計画では、将来都市像を「くらしやすさで未来をともにつくるまち」としている。今までのくらしやすさに更に磨きをかけていこうということが、今後 10 年の総合計画である。“くらしやすさ”というワードは、ここにすんでいる方たちに対するものだけでなく、観光という意味でも力を入れていかなければいけないと思っている。いわゆる伊豆地域の観光地とは違う観光で行かなければいけない。

※１　シビックプライド…都市に対する市民の誇り。ここでは町に対する町民の誇り。

※２　コミュニティ・スクール…学校運営協議会のこと。学校運営に関して、保護者及び地域住民の学校運営への積極的な参画の促進や連携強化を進めることにより、学校、保護者、地域住民等と信頼関係を深め、一体となって学校運営の改善、地域に開かれた信頼される学校づくり及び児童生徒の健全育成に取り組んでいる。

※３　シームレス…途切れのない。つなぎ目のないこと。